
裸身

北極猿

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

裸身

【Nコード】

N4205E

【作者名】

北極猿

【あらすじ】

小さな工業町に住む内気で小柄な主人公・西山コウタ。夏休みに、飼っていた猫が失踪を遂げ、数少ない友だちを失ったと落胆するコウタ少年に転校生・石井カズマという新たな友だちができる。二人は急速に接近し合い、仲を深めるが、転校生には人に言えない秘密と劣等感とがあった。少年期の出会いと別れを描いた青春中編小説。

「車輪の下」と「スタンド・バイ・ミー」をオマージュにした児童書よりの小説です。普段より読みやすく改行を加えています。PDF推奨。

裸身

第一話 「ジロの失踪」(前書き)

「やあ、ハイルナー。なにをしているんだい？」

「ホメロスを読んでいるのさ。君は？ ギーベンラード」

「そうじゃないだろう。君がなにをしているのか、僕はもう知っているよ」

「車輪の下」ハンスとハイル

ナーのやりとりから

第一話 「ジロの失踪」

少年は初めのうち、その変化に気がつかなかった。いや、家族の誰ひとりとしてその変化に気づく者はなかった。日々は特になんどの感慨もなく過ぎ去り、以前と同じように時を刻んでいた。少なくとも少年とその家族にはそう思えた。だが一日一日を積み重ねていくうちに、家庭内の平衡感覚のようなものが段々とずれ始める。何か傾きつつあるようだということをようやく家族は知る。それは無意識下におけるパワーバランスのようなものであったかもしれない。

「猫がない」

少年はそれと気づかないうちに、ふと言葉に出していた。その言いはまるで、目にしたものをそのままなんとなく口にしてみるだけでもいったような風だった。例えば雲を見上げて「くも」、ベランダにすずめが停まって「とり」という具合に。

彼はベッドに寝転がりながら、手を頭の後ろで組んで部屋の天井を眺めていた。ここのところ何かがおかしい、と少年もやはりうすうすとそれに気がついていった。部屋にはベッドと折りたたみ式のテーブルがあり、窓際には一階から運ばれてきたお古のテレビと本棚があった。本棚に並んでいるのはマンガばかりだ。少年はベッドからのっそり身を起こしてそれら部屋の調度を色素の薄い瞳で眺めると、シーツを掴んだ手をふいにぴくりと動かした。

「猫がない」と少年はまったく同じようにつぶやいた。だが今度のは確信に満ち、戦慄の響きがあった。猫がない、そう、猫がないのだ！

少年はあわてて立ち上り部屋を出ると、大きな音を立てて階段を下り、居間の戸口に立ってさっきと同じようにぼんやりと放心した様子で部屋を見渡した。土曜の昼下がりに、母親は冷蔵庫に飲み込まれるように頭を半分突っ込んで夕食の材料に見当をつけている。弟は一階の大きなテレビで朝からずっとテレビ・ゲームをしている。父親は 父親の姿はない。きつと釣りか何かにでも出かけてしまったのだ。

少年は母親に声をかけると、不安で胸をいっばいにさせながら猫のことを訊いてみた。彼にとってみれば空が落ちてきたような恐怖だった。きつとこれは自分の思い過ごしに違いないんだ、と彼は思った。自分のあずかり知らぬうちに誰かがおばあちゃんの家にも預けてしまったに違いない。母親は一瞬、なんのことだろうという顔を浮かべ、それから手に持っていたレタスをテーブルの上に置いた。そこは家族みんながいつも夕食時に揃うテーブルだった。

母親は急に神妙な顔をしておもむろに腕を組むと、食器棚を見上げながらはてという具合に首をかしげた。まるで部屋の中に蝉でも止まってるんじゃないかしらというような感じで。それから母はこゝとに思い当たったものと見えてふいに息子に視線を落とした。

「猫？ ジロちゃん？」母の顔は急に険しくなった。

「そうだよ。ジロだよ」少年は半分怒ったように、半分不安に駆られたようにそう言うと、自分が思わず泣き出しそうになっていることに気づいた。あの猫をいちばん可愛がっていたのは他ならぬ少年だったのだ。彼は涙がこぼれないように唇を噛み、足をばたばたさせながら母親に向かって続けた。「ねえねえ！ だからどこに行っただの？ お母さんがきてよ」

「さがすつて言ったって……」母親は困ったように眉をしかめた。彼女はレタスを掴むと腰を屈め、また元のように冷蔵庫にしまった。「自分がいけないんでしょう。ちゃんと目を配ってないから」

「僕のせいじゃないよ！」と少年は叫んだ。見る見るうちに目が真っ赤に染まった。

母はため息をついてから、やれやれという具合に首を振り、次に後ろを振り返って少年の弟の名を呼んだ。「あなた猫知らない？ ジロちゃんんだけど」弟は二度生返事をし、兄が怒鳴って催促すると、「知らない！」とだけわずらわしそうに大声で返事をした。

少年の胸にあった疑惑は、今では激しい動悸に変わっていた。わざわざいめた不吉な予感がさそりとなつて胸を這いずり回り、狼に追い立てられる羊そっくりの気分になった。彼は今すぐにでも家を飛び出してジロの姿をその目にしたい衝動に駆られた。

「僕、さがしてくる」と少年は決意して言った。

「いいけど……」母親はそこで言い淀み、再びため息をついた。今度のため息には哀れみが含まれているようだった。「でも遠くまで行かないでよ。自分が迷子になっちゃしょうがないんだからね。お夕飯までには帰ってきなさい」

きつともう見つからないだろう、と母親はそう思った。いなくなつた猫はこれで二匹目だったからだ。

*

裸身

少年の住む街は工業地帯に囲まれており、さらにその工業地帯の

周りを覆っているのは海と山だった。

工場からは朝晩問わずに煙突の白い煙が上がり、灰色の建物は常に赤い光を点滅させている。街の子供達は大体あまりそちらがわには近寄らず、雑木林の中で遊んだり、時には隣町の市民プールまで出かけたりしていた。親たちも「あまり工場の方へはいくなよ」と子供をしつけた。交通量の多い国道がそばを走っているし、だいいち子供を火力発電所や製鉄所に近づけようとは思わない。おもしろいことに街のある公園は工場の真横に位置していたが、そこも幽霊が出たとかなんとかでいつそう子供が寄り付かなくなっていた。

そもそもこの街では猫がいなくなることにすら稀まれである。街は小さかったし、いなくなつた飼い猫の大抵は誰かが見つけて届けてくれたからだ。ここでは子供がひとりいなくなるだけで街中に火が点いたように大騒ぎするのが土地柄でもあった。

少年はまず最寄りの公園に足を運んだ。それから夜な夜な猫達の集会所となっている駐車場を見て回り、そのどちらにも自分の家の猫がいなかったことを確認すると、あとは半分うなだれてぶらぶらとあてもなく街を歩いた。外にいる猫たちの姿はまだまばらで、概ねどこか人のいないところで昼寝に従事しているようだった。八月の空はそのまま油彩画として額に入れても遜色ないほどに素晴らしい晴れ模様で、夏らしい陰影のある立体的な白雲はほんの少し少年の心を躍らせた。だが自分の使命を思い出すと、彼はまた暗い気持ちになった。今ではどういうわけか猫の顔すらさっぱりと思いだせない。

裸身

あれほど愛していたにもかかわらず？ 街を練り歩くうち、気づくと少年の胸にあったような希望は、消耗するようなかたちでとうにしぼんでしまっていた。

猫はもうこの街にはいないのだ。

母親は少年が家に帰って来たことに気づくと、台所で皿を拭いていた手を休め、玄關まで行って傷心した息子を慰めた。彼女はこういう時の息子の扱い方がまるでわからなかった。どう対処していいのかわからない。息子はまったく泣かなかったのだ。というよりも彼は泣けなかった。胸にあっただのは底のない欠落感だけだった。そこに感傷的な涙が入り込む余地はない。彼の胸のうちで、重く息苦しい空気がゆっくりと下降していくようだった。泣けたらどんなによかったことだろう、と少年にすらそう思えた。母親もその痛みをわかってやるうとしたが、残念にも彼女の口から出た言葉は少年をことさらに虚しくさせた。

「また近いうちに違う新しい猫を飼えばいいじゃない、ね？」

母はそう言つと息子の頭を撫でて、さあ手を洗ってらっしゃいと言った。だがその声は少年の耳にはうまく届かなかった。

第二話 「クールな転校生」

次の週に少年はいくらか明るさを取り戻し、学校の友達に誘われて公園のサッカーに顔を出すことになった。その年頃の少年が往々にしてそうであるように、彼もまた忘れるという極めて重要な能力を生まれながらに備えていた。友達は少年に、今日は特別サッカーの上手いやつが来るから用心した方がいいぜと言った。どんなやつなのかと少年が訊くと、転校生だと彼は答えた。

「夏休みなのに？」と少年は気になって訊いてみた。

「学校には二学期から来るらしいよ」

「へえ」

「おれんちのすぐそばに住んでるみたいなんだけど、いつもひとり壁とサッカーしてるから誘ったんだよ。かわいそうだろう？」

それには少年も同意して、「うん」と肯いた。

昼ごろに彼はやって来た。転校生はほっそりとしていてその年頃にしては背が高く、手に何か図鑑のようなものを持っていた。髪は栗色で、前の毛は目に半分かかっていた。肌の色は白かったが、不健康な白さではなく、少年らしい無垢な白さ。どちらかと言うとクリーム色に見えた。少年はその転校生をひと目見たときから、どこか別の場所で、もっと昔に見かけたことがあるような気がしてならなかった。もちろん髪の色にも多少驚いたが（なぜならそれは明らかに染料で染められていたからだ）、それ以上に一種独特の、な

んとも言い難い懐かしい匂いを感じた。転校生はやや憮然とした面持ちで公園のベンチに凶鑑を置くと、薄手の半袖シャツを脱いで着古したTシャツ一枚になった。そして少年らのボールの交換に混じった。

たしかに転校生のボール捌きは三人の中で飛びぬけて上手かった。彼はボールを手品のように扱い、時おり魔法のようなりフティングを披露してみせた。猫を失った少年は、彼にパスを出すたび胸がどきどきとした。先天的な資質が本能的に彼を惹きつけたに違いない。少年らしい憧憬の念を持って彼は転校生を眺めた。そして転校生も決してその期待を裏切らなかつた。

夕暮れ近くまでサッカーは続いた。猫を失った少年の友達は少年とは反対に、転校生からボールを奪うことで夢中になっていた。そのせいできわどいスライディングも何度かあった。しかし転校生は、いつもそれを見透かしたように絶妙のタイミングでフェイントをかけて友達を抜き去り、またなんでもなさそうにリフティングを始める。やがて少年の友達はもう嫌だ嫌だと言って（でも何が嫌なのかは具体的には言わなかつた）、ふてくされてしまった。猫を失った少年は彼が何を言っているのかよくわからなかつた。自分から誘ったのに何を嫌ということがあろう？ 転校生は終始寡黙で、リフティングを続けながら目も合わさずに「帰れば」とだけ冷たく言い放った。彼はこの季節だというのに汗もほとんど掻いていなかった。

裸身

険悪な雰囲気がしばらく続き、危うく喧嘩になりそうな始末だったが、ふてくされた少年はじゃあボールを返せと言い、転校生から受け取ると、わざとらしいくらいいきびきびとした動作で歩き、一度もこちらに振り向かないまま、自転車に跨って本当に帰ってしまった。

公園に残ったのは少年と転校生だけになった。場にあつた熱が急激に収束するに従い、風も心持ち冷たくなった。ほんのりとした憂愁的な橙だいたいが街の果ての工場地帯を覆い、カラスが二羽交互に鳴いて空を渡つていった。集落にはぼつぼつと軒の明かりが灯り、それに呼応するように公園の水銀灯も二三度もたつきながら灯った。転校生はしばらく黙つてその場にじつとしゃがみ込んでいたが、やがてゆっくり立ち上がると何事もなかったように　そして猫の少年などその場にいないかのように　ベンチに引き上げ、凶鑑を脇に抱えると、シャツを羽織つて公園から出て行こうとした。見る限り彼はどこまでも厭世的な子供に見えた。

「ねえ」少年は決心を鈍らせないうちにと、半ば叫ぶように言った。
「帰るの？」

「もう帰る」

「どつして」

「さよなら」

転校生は自転車のペダルに足をかけると、背を向けたまま短くそう答えた。

「あいつが怒つたから？」と少年は大きな声を出した。

「ちがうよ」

「じゃあどつして帰るの？」

転校生はため息をついて少年に振り返った。「だってもう六時をすぎてるから」

「六時か」と少年は言った。彼は時間のことなどすっかりと忘れていた。

それから意味のない沈黙が流れた。近所の窓が開いて洗濯物を取り込むばたばたという音が聞こえた。転校生がペダルを踏んだところで「ねえ、じゃあさ……」と少年は切り出した。転校生はまた大儀そうに顔を向けた。そして少年の方を向いたまま黙っている。

「じゃあジュース飲んでから帰らない。せめて」

「ええ、何て？」

「ちょっと待って。ここに三百円あるからさ」少年はポケットから百円玉を三枚取って手のひらに載せると、わかりやすく転校生に向かって開いた。「ほらね。いや嘘じゃなくって。これでペットボトル二本分買えるから」

転校生は彼の言うことの意味がよくわからないようだった。

「奢ってくれるの？」

少年は肯いた。「そう。だからもう少し遊ぼう」

「どうだい」

「向いっつ」

裸身

裸身

彼は肘をまっすぐにして目的地を指差した。

第三話 「新たなる友情の芽生え」

「ねえ、どうして髪が茶色なの？」

二人は自転車を押して近くの商店まで並んで歩き、途切れ途切れにゆっくりと言葉を交し合った。子供らしい警戒心と気恥ずかしさがいつしよくたになって、猫の少年を落ち着かない気持ちにさせていた。だが決して居心地の悪さを感じたわけではなかった。二人の様子は、ストーブの前に置かれた氷塊が時間をかけて溶融していく様に似ていた。少年の自転車と比べて、転校生の自転車はひどくろだった。ところどころが錆びつき、時おり出し抜けに軋むような音を立てることがあった。未舗装の砂利道を歩いていたら余計だったのかもしれない。少年が気にかかっていたのはやはり、転校生の髪の色だった。茶髪と同級生なんて彼は始めてだったからだ。

「染めた」と転校生は短く説明した。

彼もまた少年をある位置にまでは受け入れてくれているようだった。愛想はなかったが、サッカーをしているときほど冷たくもなかった。猫の少年にはこの変化が少し嬉しかった。

「自分で？ お母さん？」

「自分で」

「ふうん」と少年は感心して言った。そして少し嘘かもしれないとも思った。「なんで染めたの」

「別に。格好いいと思ったから」

「ふうん。そうかあ　でもそれ僕はいいと思うな。うちでむかし飼ってた猫もそんな毛色をしてたっけ」

「猫ね」と彼は気のない返事をする。

「猫は好き？」

「さあ。でも猫は気楽だから」

「お母さんに怒られなかった？　その髪の毛」

転校生は急に返事をしなくなった。何か考えるように遠くを眺めた。猫の少年がそれに釣られて、彼の視線を追っていくと、そこには陰鬱な色調の工場がずらりと並んでいる。しかしもういちど彼の目を見たとき、彼が見ているのは工場ではないと気づいた。何を見ているかはわからない、ただ彼の両眼は何か別のものを捉えている。彼はのちのちになっても、こんな風にどこか堂に入った目つきをすることがしばしばあった。

「あんまり俺のこと訊かないで」

少年は転校生のこの返事に不思議な寂しさを感じた。そしてそれを受け入れたくないばかりに「でも知りたい」と反発した。

「駄目だよ」

「だって君転校生なんだから……」彼はそこまで言いかけて言葉に詰まった。「もうこっちに友達いる？」

「いないよ、いるわけない」

「じゃあ友達になろうよ」彼の中のアつかましがこう言わせたのではない。彼の中の未熟さが彼にこの言葉を言わせた。

「ねえ、じゃあまず自分のことを話すべきだよ」と転校生は大声で切りかえした。「まずおまえ名前は 何年生 どこに住んでるの?」

猫の少年は、彼が突然怒ったように質問するのを受けてちよつとひるんだ。

「西山コウタ」と小さい声で自分の名前を名乗る。

「それが名前?」と相手は責め立てるように訊く。

「うん」

「もう一回」

「西山コウタ」

「コウタ君ね。コウタコウタ……西山コウタ……」彼は足を止めて口の中でつぶやいた。それから顔を上げて猫の少年をまっすぐに見る。「いいよ。わかった友達になろう 俺すぐ怒っちゃうんだ。ごめんね、おまえって呼んだりして」

裸身

浩太は口を噤んだまま首を振った。彼は癩症な子供というのをそのとき初めて見た。

「俺は石井カズマ」

「うん。君は石井カズマ。なんて呼べばいい？」

「君って呼ぶのはやめて。嫌いなんだ、そう呼ばれるの。気持ち悪くて」

コウタ少年が傷ついたような顔を見せたのを、転校生は感じた。

「俺はカズマでいいから」と慰めるように彼は言った。

「うん、じゃあカズマにしよう。石井なんて名字の人間はいっぱいいるしね。だから僕のことも名前で呼んでいいよ」

「もちろん」とカズマは言った。このもちろんには「当然そうするさ」というおごりたかぶった印象があった。名前を呼び合う点においても対等に扱われるべきだという一種尊厳めいた、よく後ろ盾のないひとりぼっちの少年がするような、みくびられたくない反応のひとつのように思えた。あるいは彼の冷淡な反応には全てこれが関係しているのかもしれない。

「ねえ、その手に持つてる本は？」と覗き込むようにコウタは訊いた。

「これ？」と言ってカズマは図鑑を目の前にまで持ってきていき、それから形式的に背表紙を確認した。「これは星座の本だよ」

「どうして星座？ 星が好きなの？」

裸身

「うーん」転校生は口をすぼめて、頬の内側で舌を転がした。「別

に……そこまで好きじゃないよ。でも夏休みの課題があるだろう？
そのために借りてきたんだ」

「ふうん。転校生にも宿題はあるのか」

「そう、あるんだよ。ダンゼン」

二人は小ぢんまりした商店に入ってそれぞれのジュースを買い、また来た道を戻って公園まで歩いた。コウタ少年は本来ならもう帰らなければいけない時間だったが、せめて転校生が帰りたいというまでは待とうと決心した。彼はもつとこの謎に包まれた、サッカーの上手い転校生を知りたかった。転校生というのはそれでもなく、ミステリアスなものだ。彼は自分が今学校内でいざばんこの転校生を欲しいままにしているのだという不思議な悦びを感じていた。学校の連中はまだ転校生がやって来たことすら知らないだろう。彼は秘密を手に入れたようで嬉しかった。

それにこの転校生はとても美しい少年だった。サッカーの時と同様、彼は少年の期待を裏切らなかつた。彼の態度にも不思議と好感が持てた。二人は公園に戻るとベンチに並んで座り、また話を続けた。転校生は自分が何度も転校を繰り返していることをコウタ少年に打ち明け、覚えている限りではこの街が五度目の転校だと教えた。そのため彼は別の街のこととたくさん知っていた。ある街では商店街で年に一度、子供限定でコーラの一气飲み大会があり、またある街では正月に凧をどれだけ長い時間飛ばしてられるかを競う大会があった。コウタ少年の心は転校生が何か新しい話を始めるたびに激しく躍り、少年の胸を内側からもつと叩いた。彼の隣に腰を下ろしていると、コウタは転校生から胸をかきたてられるような不思議な匂いを感じた。それは初めての恋にも似た、信頼が芽生えた時特有の美しい友情の匂いだった。

だが本格的に夕暮れが街を染め、工場の赤い瞳が際立って点滅し始めると、話の続きはまた次の機会に持ち越されることとなった。コウタ少年は出来ることなら転校生を自分の家の食卓に招いてもっと話が聞きたかったが、両親がいい顔をしないのはわかりきっていた。それで彼は早くも、次はいつ遊べるのかと転校生に尋ねた。カズマは別にいつでもいいと答えた。

「明日でも？」

「ああ、別にいいよ」となんでもなさそうに転校生は答えた。「まだ宿題はやってないけど、元々やるつもりもないから」

「じゃあ明日は街の案内に繰り出そうか　だってまだカズマは全然この街を知らないわけだろう？」

「うん」と転校生はいさぎよく肯いた。

「明日の朝十時にここで待ち合わせよう。それでいい？」

「オーケー。ちゃんと来るよ」

「約束」コウタはそう言って小指を出した。カズマはちょっと不思議そうな顔をしてからその意味を理解したものと見えて、自分の小指も差し出した。コウタが誓いの言葉を唱えて互いの指が離れると、二人はおかしそうに笑った。

「約束を破ると指が腐るんだぜ。知ってる？」

コウタは思いもよらなかつたというように口を開けて首を振った。

「知らない。本当？」

「ハハハハ、嘘だよ冗談」

彼が笑うと、その笑顔はコウタ少年のそれよりも幼く感じられた。肩が小刻みに上下し、口の周りに細い二本のしわがくつきりと浮かび上がる。コウタはその新しい友人から『屈託のない笑顔』というものを学んだ。

そして二人はその日、出会ったのと同じように公園で別れた。

*

猫がいなくなったことで傾いた西木家のパワー・バランスは、母親がしばらくのあいだ懸命に埋めることで取り持たれていた。母親はできるだけ子供たちのために時間を割り、なるべく子供と同じ部屋にいるよう努めた。弟はある朝に突然、猫がいなくなったことを本格的に自覚したものと見えてわんわん泣き出したが、兄の方はもう平気だった。新たな興味深い友達を見つけ、そちらの方に目を輝かせていたのだ。それに新たな友達猫よりずっとスリリングだった。

裸身

土曜の朝十時、コウタは転校生を引き連れて気ままに街をぐるっと一周して回り、どうでもいい建物から思い出の土地、街の施設まで気の赴くままに紹介した。昼過ぎになると多少疲れたものと見えて、彼らは大きな湖のある自然公園で昨日と同じようにベンチに休んでジュースを飲み、鳥達が水しぶきを上げながら魚をついばんでいく様子を眺めていた。このときもコウタ少年は信頼のしるしとしてカズマにジュースをご馳走した。二人はずぼんの裾を膝下まで捲

つて足先を湖のほとりに浸し、猛烈果敢な真夏の暑さを凌いでいた。転校生はTシャツの袖を肩口まで捲くり上げ、角ばった弓のように細く白い肩をのぞかせていた。コウタ少年はその肩に手を置きながら足をぶらぶらとさせ、時おり反対の手で湖面に小石を投げ込んでいった。

「ねえ、学校は好き？」ふと思いついてコウタは尋ねた。

「好きじゃないよ。楽しくないもの、あんなとこ」

「ふうん」と言つてコウタはぶらつかせていた足をぴたりと止めた。「好きな授業とか得意な科目ってないの？ 体育は好きでしょ？」

「体を動かすのは好きだけど、別に楽しくはないね。こうしてコウタと遊んでる方がずっと楽しいよ」

「え、本当に？」

「そんなことで嘘つかないよ。ほんと」

「へえ」と言つて嬉しそうに笑うと、コウタはまた足をぶらぶらさせた。あまりに笑顔が治まらないので口をふさいだものの、その隙間からも笑みは零れていた。彼は何より気恥ずかしかった。

裸身

夏の盛りりの自然公園は緑にあふれていた。散歩道にはゆらゆらとした木の葉の影が落ち、時々むっとする風に煽られて手を振るように大きくざわめく。彼らはしばらく湖のほとりで語らったあと、公園の遊技場へ行ってトランポリンの上を跳ね回った。他にも子供はいたが、みなほんの小さい子供ばかりで、遊技場は彼らの独壇場だった。

三時になつてすっかり疲れた彼らは帰路に着きながら、また今度ここへ釣りに来ようと約束した。うちには父親の釣具がいっぱいあるし、使わないやつならきつと貸してくれると思うから、とコウタは言った。それを聞いてカズマは「オーケー」と微笑む。コウタ少年はその新たな友人の笑い方がやはりとても気に入っていた。中でもおかしい冗談を言い合ったような時に見せる、腹にぐっと力をこめて笑う動作が好きだった。彼がそうして笑った時に限って、つやつやした茶色の髪がさらさらと彼の額で揺れるのだ。

第四話 「おかえり、ジロ」

週明けに不思議なことが起こった。いなくなった猫のジロが、西木家にまた舞い戻ってきたのだ。猫は庭のブロック塀を渡り、勢いをつけて階段途中の小窓に飛び乗ると、それから前かがみになって短い廊下に着地した。トン、というその音で、風がよく入る涼しい居間にいた少年はふと顔を上げた。振り返ってみるとそこには耳のぴんと立った、毛並みのいい茶色い猫が超然と澄まして体を伸ばしている。まるで「やれやれ。今までいやいや狭く苦しいところに閉じこめられていたんだよ」みたいな感じで。少年は息を呑んでそれを見つめていたが、やがてゆっくりと立ち上がって猫を抱き、その場に座って猫の顔に頬を摺り寄せた。「お前今まで……」と少年が言いかけたところで猫はひよいと少年の腕を離れ、開けてくれとばかりに部屋の戸を爪の先でかりかりと引つ掻く。彼は二階にいる母を呼び寄せてジロが帰って来たことを報告した。

「ほんとにこの子は。……あんたどこに行つてたの？」母親はジロの首根っこを掴んで反対の手でひげをつまみ、難しい顔を作つてそう詰問した。やはり猫は超然としている。おかしなことに猫のジロには特に目立つた外傷も毛の汚れも見当たらず、あるいは今まで誰かに飼われていたのかもしれないとすら家族に思わせた。

「ああ、そうね、もしかすると向かいのアパートの人がもしれない」といささか迷惑そうに眉をしかめながら母は言った。「あそこのうち野良猫に山ほどエサを与えてるのよ。だから近所の野良がみんなぶくぶく太つて」

裸身

肝心の猫はひとことも口を利かない。ジロは母親の膝元で丸くなり、兄と弟をわずらわしげに見つめていた。弟が猫の前足を掴んで

もてあそぶと、猫は特に注意も払わず、されるがままになってじつと部屋の虚空を見つめていた。

「でも帰ってきて本当によかったよ」と母に向かってコウタは言った。「次からはもう外に出さないでいいよ。うちの中に置いておこう」

「ここらへんにいたってことなんだろうね、おそらくは」と母親は息子の提案を聞いているのか聞いていないのか、まだ今まで猫がどこにいたのかについて気に掛かっている。

「ああ、そうだ！」と突然、猫とじゃれていた弟が思い立ったように顔を上げると、得意の舌たらずで果敢に話し始めた。「お母さん、あのね、もしかするとね、ジロは工場に行ってたのかもしれない」

「どうして工場なんだよ」と兄が言う。

「いなくなった猫はみんな工場に行くんだ。それで機械の燃料とかにされちゃうんだよ」

弟はしごく真面目な顔で言ったが、母は思わず声をあげて笑った。

「馬鹿ね。そんなことないから安心しなさい。あそこはちゃんと国の許可だっってもらってるんだから」

「本当だってば！」と弟は母に向かって不服げに訴えかける。「嘘じゃないよー！」

「どこでそんなこと聞いたんだよ」と兄のコウタが口を挟んだ。

「六年生がそう言ってたんだ。兄ちゃんよりもっと上の六年生がさ」

「嘘だ、そんなこと」

「本当だよ。聞いたんだから」

「ほらケンカしないの。そんな下らないことでいちいち」と母親は二人を制した。「なんならお父さんに訊いてみなさいよ。お父さんだったらなんでも知ってるでしょうから」

「信じないからいいよ。そんなもの」と兄は言ってから、歯を食いしばって弟を威嚇した。彼は弟が話の信憑性に自分より年上の上級生をひきあいに出してきたのが気に食わなかった。やめなさいよ、ほら、と母が兄を押しつけると、弟が母親の後ろに隠れた。兄はこういう時の姑息な弟がいちばん嫌いだった。『普段はあれだけいつも遊んでやってるのに!』と彼は心の中で憤慨した。しまいにコウタはふてくされたように鼻を鳴らせて立ち上がると、冷蔵庫を開けてジュースのパックを取り、「バーカ」と弟に言っただけで自分の部屋に戻って行ってしまった。後ろで弟が何か冷やかすようなことを言ったが、兄は無視して階段を上がった。猫は頓着せずにまだ部屋の壁を見つめている。

*

コウタとカズマは八月最後の週になって自然公園に足を運び、湖のほとりにならんで以前と同じように水辺に足先を浸し、水草の中に針と糸を垂らしていた。釣竿は頼りになる上等のもので、獲物がかかるほど強くしなった。二人は午前から釣りを始め、昼までには三匹のブラック・バスを吊り上げていた。しかし魚はどれも逃がしてしまった。カズマがそうするべきだと諭したのだ。どうせ食べられないんだから逃がしてやろうよ、と。

それまでの話題に区切りがつくと、そうそう、と切り出して、コウタ少年は猫が我が家に帰ってきたことを報せた。なんのことだい、とカズマは言った。

「あれ、話してなかったっけ」と目をぱちくりさせながらコウタは言った。「うちの猫が突然いなくなっちゃったんだ、この前。でもまた突然帰ってきた。わけがわからないよ、本当に」

「へえ。それでどこに行ってたのか見当はついたの？」

「さあ、さっぱり」と釣竿を手に持ったままコウタ少年は肩をすくめた。少年の体に比べると、釣竿はいやに大きく見えた。「一説によると工場で燃料にされかけてたって話だけだ」

「燃料って？」

僕にもよくわからないけど、と前置きして、コウタは弟に聞いたとおり説明した。

「ふむ」とカズマは唇をゆがめた。「そいつはなかなか剣呑だね」

「ケンノンって？」

「面白そうってことだよ、つまり」カズマはそう言うと、ふんと力を込めて釣竿を手前に引っ張った。ぼちゃっという重たい音がして湖面をのぞき込んでみると、針の先に掛かっていたのは泥を纏った木の枝だった。彼は舌打ちをして、半分しりごみしながら針についたゴミを取ってそこいらに放り投げた。彼はそれから言った、「ねえどうだろう、二人で行って見ない？ その猫食い工場とやらに」

「ええ？ 何しに？」

「何しにつて、決まってるよ。機械を壊しに行くんだ。猫を食べちゃう機械なんてない方がいいだろう？」

「でもほんとにあるのかなあ」とコウタ少年は疑わしそうに言っつて釣竿を岸に置き、その場に寝そべつて頭の後ろで手を組んだ。空には湖面と変わらない澄み渡つた青空があつた。

「おれはあると思うよ。きつとね」

「どうしてそう思うの？」と寝そべつたままコウタは言う。

「どうしても、だよ。二人でいつか一緒に行こうぜ」彼は釣竿をそばに放り投げ、コウタの顔を上から覗き込んだ。「ねえ、それはそうと、コウタは大人になったら何がしたい？」

「何がしたい？」と不思議そうにコウタ少年は繰り返した。

「将来の夢だよ」カズマはそう言つと自分もコウタの横に寝そべり、同じように頭の後ろで手を組んだ。「大人になったらの話。なにかしたいことくらいあるだろう？」

裸身

コウタはそれについてしばらく悩んでから、少し前までは競馬の騎手になりたかつたかと彼に告げた。六歳の時親戚の叔父さんに連れ行つてもらつた競馬場で、彼はたいへんな感銘を受けたのだつた。しかしその時の感動は年々古ぼけたものになり、記憶も果たして実際にあつたことなのか、それとも半分くらい自分で作り上げてしまつたものなのか、少年には判断がつかなくなつてしまつていた。な

んにせよその思い出は今では輝きを失い、遙か昔、前世のことにように思えた。

「カズマこそ何になりたいの？」ややあつてコウタは尋ねた。

「おれは何にもなりたくないよ。ひとつだけ目標はあるけどね」

「どんな目標？」

「大人の中の大人になること」と彼は意味深に続けた。「どんな時も冷静に、それでいてシンシにふるまう。誰の手も借りずに生きていけるくらいタフにならなきゃ……でもこれってけっこうたいへんなことなんだぜ、しかし」

「僕はてつきりサッカー選手になるのかと思ってたよ」といくらかがっかりしたようにコウタは言った。

「サッカーも楽しいけどね」と言ってカズマはコウタに振り向き、目を合わせると楽しげに笑った。「お母さん、好き？ 自分のお母さん」

「ええ、どうして」

コウタ少年は顔を赤くした。正直に好きだと言って、親離れのできない子と思われるのが恥ずかしかった。

「じゃあお父さんは？」と答えないうちに次の問いが始まる。

少年はしばらく悩んでいたが、「わからない」と首を振った。

その日、カズマはなかなか家に帰ろうとしなかった。コウタ少年がカズマと遊ぶようになって五度目のことだった。彼らは自然公園を出ると街の方角に引き返し、人の良い子供好きの老人が経営している例の商店のベンチに座って、夕方すぎまで気ままに語らった。だが気ままだったのは六時の鐘が鳴るまでのこと（なにせカズマとあの日遅くまで遊んだことで、コウタ少年は父親からたつぷりとお叱りを受けていたのだ）、当然コウタは見るからにそわそわし始めた。それにひきかえカズマの話はなかなか終わりが見えてこなかった。いや、彼の話にはどこか堂々巡りをしているような印象さえあった。継ぎ目こそ巧妙に隠されているものの、本当に伝えたいことの周りをぐるぐると同じように延々回り続けているのだ。

コウタはそろそろ帰ろうよという言葉を何度も言いかけたが、友人を残念な気持ちにさせるのが怖くてうまく切り出せなかった。後ろを振り向いて、商店の店主が気を利かせてひとこと「もう帰りなさい」と言ってくれることも期待したが、老人は店番をほっぽりだして奥でのんきに夕食をとっているらしかった。

夕暮れが空の端から段々暗色を帯びてくると、コウタ少年は眉をへの字にしてカズマの話にうんうんと肯くことしかできなくなった。いつの間にか話すことにまで疲れてしまった。風が冷たくなり、むき出しのすねや両腕をひんやりと撫でた。六月からずっと暑かった分、もう夏は終わりかけていたのだ。コウタはカズマの話が終わりそうもないことを見ると、彼の話している途中に、黙って彼の腕をとった。それで向こうもびたりと話を止めた。

「どうしたの？」とカズマは真剣な顔つきで言った。

「もう帰ろう」とコウタは悲しそうな目をして言った。自分の顔が

とてつもなくへんてこに思えた。

カズマは一度だけ眉をひそめ、それから「ああ……」と思い当たったような声を出すと、催眠から解けたみたいに親しげな笑顔を見せた。

「ごめん」と彼は言った。「おれも急いで帰らなきゃ」

夜、ベッドに潜り込みながら、コウタは友人が伝えたがっていたことについて考えていた。きりのない話をしている最中、彼の目にはどこかしら曖昧なものがずっと漂っていたのだ。コウタはしばらくしてその曖昧さに思い当たった。彼は、カズマは自分の目を見て話をしていなかったのだ。ずっとあの堂に入った目つきだった。でもその結論からなにかを得ることはほとんどなかった。少年はあきらめてそのまま眠ってしまった。

第五話 「工場の噂とカズマの秘密」

工場の噂は昔からあるものではなく、比較的最近のうちにできたものであるらしかった。弟が上級生から聞いたという話も、話自体の信憑性はともかくとして、新学期の始まった途端にコウタ少年の耳に飛び込んできた。「猫だけじゃなくて子供も食うらしいぜ」とか「昔に工場で事故が起こって……」とか尾びれや背びれはついていたものの、話の筋はどれも似たようなものだった。もっとも彼は弟に対してそうしたように、そんな噂話を鵜呑みにはしなかったが、時おりそのせいか変わった夢を見るようになった。

夢の中でコウタ少年はぐったりとした生温かい猫を抱きかかえ、ひとりで夕暮れの工業地帯に足を踏み入れる。機械の規則正しく動く音や、遠くから聞こえる電車の音がいやに耳の中にこびりついている。工場はいつものように赤い瞳を点滅させ、薄闇の中で物々しい存在感を放っている。彼はいつもそこでおぞましい何かを目にした。夢のパターンはいくつかあったが、最後に必ずおぞましい何かを見ることだけはたしかだった。しかしそれも目覚めてすぐは細部まで覚えているのだが、顔を洗って歯を磨き、さてと思うと決まってすっかり忘れていた。どんなに像を保とうと思っても、まるでトランプ・カードの城みたいにちよつとした意識の変化で跡形もなく崩れ去ってしまう。

裸身

九月の中ごろに、小学校の生徒が何人か肝試しに工場へ足を踏み入れたという噂が飛び交った。どうやらそれは事実であつたらしく、具体的な名前まで挙がっていた。そのせいで校長が朝礼の時に注意したほどである。しかし彼らは大方の予想どおり何も見なかったし、工場の作業員に見つかってこっぴどく叱られたということだった。コウタ少年はこれに当然だなと思いつつもどこかほつとした。

二人の信頼関係は、新学期が始まって薄れることなどありはしなかった。コウタとカズマは学校が終わると必ずそろって帰宅し、別々の教室で授業を受けているにもかかわらず、休憩時間になると一目散にどちらかがどちらかの教室へ走り、いつも時間の続く限りぴったりと身を寄せ合っていた。大体が教室の角に二人で座り込み窓辺に停まったすずめを指差したり、何かおもしろい冗談を仕入れた時には二人で腹を抱えて笑った。彼らはもはや文字どおり一心同体だった。あの八月の終わりに見たカズマの不自然に長く居心地の悪い話も、今ではなんとも思わなくなっていた。コウタ少年自身、あれは何かの間違いだったのだと思った。二人はどちらも無断で別の友達を作らなかった。しかしだからと言って物足りなくなるようなことは全然なかった。彼らの幸福には誰も手を出すことができなかったのだ。

充実した日々、人生のうちもっとも恵まれた日々、十二月に入ると本格的な寒さが街に到来し、二人はそれまでの遊び場を季節に奪われることになってしまった。自然公園にある湖の岸边にはユリカモメが無数の足跡を残していき、魚たちもあまりほとりには近寄らず、湖の底を愚鈍に徘徊していた。

少年であった彼ら（特にコウタ）は、季節に体を馴染ませるのにひどく時間がかかった。おしつけがましい冬がやって来ると、彼らは大体コウタの部屋に集まり、テレビ・ゲームかマンガ本を読んで半日を過ごした。カズマ少年の奇妙なところは、彼が一向にどこに住んでいるのかわからない点にあった。カズマは決まった時間になると読んでいたマンガ本なり児童小説から急に顔をぱつと上げ、何の脈絡もなしに帰ると告げて本当に帰ってしまう。以前ならその時間は決まって六時だったが、冬になるとそれが一時間短縮された。その門限を破つたのは後にも先にもあの八月第二週の日曜と夏の終

わりだけで、ある日「泊まっていってもいいんだよ」というコウタの誘いにも「帰らなきゃ」とだけ言って取り合わなかった。家まで送って行くかとコウタが提案してみても、母親が彼に車で送って行ってあげるからと言っても、彼はやはり遠慮しますと言って断った。不思議に思っただけでコウタは母親にそのことを軽く相談してみたが、母親はカズマを全面肯定するような笑みを浮かべて（彼女が息子の友達をここまで気に入ったのは初めてだと言ってもいい）「あの子の前ではちゃんと礼儀正しくしてなさいよ」と息子に忠告しただけだった。それでコウタもそんなことを考えるのはやめにしてしまった。あまり友人の秘密に踏み込もうとするのも心ないことだと少年にはわかっていたからだ。

しかし事件が起こり、彼の素性が露見されるのはそれからすぐのことだった。

*

コウタがまず聞いたのは、三組の生徒と一組の生徒が教室のベランダでしつちやかめつちやかの壮絶なケンカをしているという話だった。コウタ少年はそのどちらのクラスにも属していなかったが、遊び半分、好奇心半分で、先生に用を使わされたことなどすっかり忘れて、そのケンカを眺める野次馬の雑踏に混じった。

すでに教室は荒れ放題で、黒板から眺めると机の列が虫に食われたみたいに真ん中だけいびつにへこんでいる。掲示板に貼られていた藁半紙も裏返しになって床にひっついていて、比較的背の小さいコウタは生徒たちが一斉に窓に貼りついておかげでまったくケンをすることができなかった。前にいた顔見知りの生徒の肩を叩いて「今何がどうなってるの」と訊いた。すると同級生は「今馬乗りになってるやつが一組の生徒で、やられっ放しの方が三組の

生徒！」と早口に興奮した様子で叫び、また前を向いて人ごみを掻き分けた。

それでコウタもぜひともケンカが見たくなつた。彼はしゃがんで床に膝をつき、生徒たちの股をくぐつて、壁に頭をぶつつけながらもそろりそろりと立ち上がって最前線に躍り出た。すぐにものすごい力で窓に押しつけられ、彼はまたおでこを窓にぶつつける。窮屈に目を開けながらベランダに視線を向けると、ちょうど下敷きになつていた生徒が反撃に出たらしく、蹴りを一発相手の腹にお見舞いしていた。そしてどうやらその一発で勝負はついてしまつたようだった。馬乗りになつていた生徒はその場にうずくまり、苦悶の表情を浮かべながらひいひい言つて足を力なくばたつかせた。下敷きになつていた生徒はよろよろと立ちあがり、ずぼんについたほこりを払つて二、三度咳をした。

勝敗が決すると、観客はため息とも感嘆ともとれる息をつき、大人がやつて来てお叱りの巻き添えを食わされる前にと、徐々にひとり二人と教室を去つて行つた。ある生徒は今度はおれの番かな、と言い、いやいやおまえじゃ駄目だよと言つてにやにやしていた。そのすぐあとのことだった。支柱の影から茶色い髪を目にした時、そしてあの白い肌が興奮と爪痕で真っ赤になつているのを見た時、コウタ少年は声も上げられないほど驚いた。彼はすぐさま人を押しつけてベランダの戸口に立ち、まだ興奮冷めやまぬ様子で肩を激しく上下させ、息を切らせた親友の姿を眺めた。彼はしばらくじつと敗者を見つめていた。カズマの目には動揺と、それから炎のようにちらつく純粹な怒りがあつた。彼のそんな姿を目にしたことなど、コウタにはこれまで一度としてなかつた。ケンカになつてもおかしくなかつたあの公園での時だつて、彼は終始冷静だつたのだ。

コウタが声を掛けるよりも先に、担任教師があわてふためきなが

ら教室へ入ってきた。普段はメガネをかけたおしとやかな先生だったが、めずらしくひどく取り乱していた。どうしたんだ、と彼が周囲を見回してそう言くと、それまで騒がしかった教室が蓋をしめたように静かになった。それから気の利いたひとりか先生の袖を軽く引き、生徒たちに背を向けてごにごによと事情を細かく伝えた。担任教師は話を聞き終えると、静かな声でわかったありがたいと生徒に言い、それからひとつ咳払いをして真面目な顔を作り上げ、ケンカの兩人に職員室までついて来るように言った。カズマはコウタのすぐそばを通って教室を出た。もうひとり悔しさに声を押し殺して泣いていたが、うつむいたまま何人かに助け起されて教室を出て行った。

第六話 「いじめと反抗」

コウタはすぐに、事情を教師に説明した例の生徒をつかまえて、僕にも教えて欲しいと頼んだ。あの茶色い髪の子は僕の友達なんだよ、と彼は説明した。けれどそんなことをするまでもなく、彼は嬉しそうに顛末を語りだした。彼としても誰かにこのことを話したくて早くもうずうずしていたに違いない。

「つまりさ」彼はわざと声を落として、話に緊張を持たせた。「初めはこうだったんだ。あの茶髪のやつがいつもどおり それにしてもあいつってほんとに静かだよなあ あいつが窓の外ばかり見て口を結んでるとさ、藤井がいきなり机にぶつかっていったんだ。つまりさ、藤井がいきなり机にぶつかっていったんだ。そこまではまあ普通っぽいだろう？ でもあいつ本当はわざとやってるんだ。藤井と同じクラスになったやつならみんな知ってるよ。あいつって誰かをいじめたくってしょうがないんだ。それであの茶髪名前なんて言ったっけ？ ああ、石井ね。石井は別に表情も変えずに返事もしなかった。するとさ、いい気になって今度はちよっかいだし始めたんだよ。数人で固まって、けらけら笑いながら黒板に『茶ぱつは帰れ』とか書いたり、遠くから『貧乏、貧乏！』って言うたりして。で、ケンカが起こる決め手になったのは藤井が家庭内のことを言い出してからだった」

「カティナイ？」

「そうだよ。あいつんちのお母さんっていかれてるんだ。頭がおかしいんだよ。なんでも突然怒ったり泣き出したりするんだってさ。そのせいで転校ばかりしてるらしいよ。藤井は自分の母ちゃんからそれを聞いたらしくってけっこう前からひそひそ噂してた。性格

悪いだろ　でね、藤井がとうとうそれに触れたんだ。あんまり黙ってるからきつと逆上しちゃったんだろうな、からかいがないがなくて。『お前のお母さんが馬鹿だって知ってるんだからな!』。それでドカーンだよ。茶髪がミサイルみたいに飛び掛って行った」

コウタ少年はそこまで聞くと「ありがと」と短く礼を言っって背を向けたが、「だから本当はみんななすかつとしてるんじゃないかな」とさっきの彼はかまわず付け加えた。まだ喋りたくてたまらないという風だった。「だってみんな藤井なんか嫌いなんだもの!」

コウタは教室を出るときに授業開始のチャイムを聞いたが、そんなものは意識のずつと外にあった。彼の手足は小刻みに震え、廊下を歩いていながら自分がどこを歩いているのかはつきりと認識できなかつた。それは今さっき起こった物事がどうやら自分にとつて小さくはないという漠然とした恐怖のあらわれであり、混乱、戸惑い、怒り、あるいは同情や悲しみにも似た共鳴だった。

やがて職員室に近づくとつれそれらの思いが集約され、彼の表情に如実にあらわれた。どうして、どうしてそんなことができるのか!　少年は思わず泣きだしそうになった。胸が燃えるように熱くなり、目のふちからはやがて涙が零れた。藤井という生徒を激しく憎みながら、それでいて深い寂寥感に見舞われていた。

生徒の話で聞く石井カズマは、自分の中の彼とはまったく違う人物のように思えた。平行する異世界に住むもうひとりの彼なんじゃないかと真剣に思った。それは彼があのだこか奥深い目をする時にも感じたことだった。その違和感のコウタ少年をふたたび揺すつた。石井カズマという人物の影が、段々と自分から遠く離れていくような幻影に取り憑かれた。

職員室で自分を向かえたのは大柄な学年主任の先生だった。こめかみがハンマーで叩かれたように落ちくぼんだ男で、生徒に対する時はいつも後ろ手だった。少年からすると本当に壁のようにとどかない体。この教師は他にも生徒をひどくひいきすることで知られており、コウタに対してはわざとと思われるくらい素っ気なく、一片の温かみも彼に感じさせなかった。

「今話し合ってるよ」と厳肅な顔つきで先生は言った。「だからもう君は教室へ帰りなさい。何しに来たんだ、授業があるだろう。さあ戻って。いいね」

「でもあの、顔だけ」

「だめだめ。早く行きなさい、ほら早く　あと途中から授業に戻る時はちゃんと学科の先生に謝るんだぞ」コウタ少年がそれでもまだぐずぐずもじもじしていると、学年主任の先生は「さ、さ、ほら、いったいって」と言って彼の背中を半ば突き飛ばすように押して、自分は職員室の中に引っ込んでしまった。コウタは来た道を引き返しながらも何度か後ろを振り向いたが、職員室から何も聞こえず、扉はぴくりともしなかった。

その日家に帰っても、コウタは友人のことが心配でならなかった。カズマ少年と藤井という生徒は、お叱りを受けたあと頭を冷やすために、それからもうこれ以上余計な騒ぎを起こさないために早びけさせられたということだった。コウタは夜自分の部屋のベッドに潜り込みながら、今からでもカズマの顔を見たいと思った。たとえ話ができなくとも、顔さえ見ればよかった。そして自分に向けられる彼の表情が笑顔であったなら、それ以上の安心はないと思えた。だがコウタは彼の家の住所も電話番号さえも知らない。遊ぶ時の約束は大体学校で交わされ、それ以前は別れの言葉に付け加えるよう

なかたちで次の予定が決められていたのだ。

カズマは今何を考えているのだろうか、コウタ少年は部屋の暗い天井を眺めてそう思った。外では風がピューピューと鳴って、窓が神経質にカタコトとわなないている。彼は自分と同じように僕のことを想っていてくれるのだろうか。会いたい、会って顔を見たいと想ってくれているのだろうか。そんな風にひどく落ち着かない気持ちでベッドに身を横たえていた少年は、ある瞬間にふと緊張の糸が途切れ、そのまま深く石のように眠ってしまった。

第七話 「悪夢からのめざめ」

次の日もその次の日も、石井カズマは学校へはやって来なかった。コウタは四六時中何か真剣な考え事にふけたような顔をして、勉強の事などまるで頭に入らないといった風だった。もしものことを考えるたび、彼の心臓は貫かれ、そのあとでいやに生ぬるい汗が額や首筋を湿らせた。

藤井という生徒は問題のあった次の日にもびんびんして学校に来ている。コウタが三組に行つて石井カズマの欠席の理由について担任教師に尋ねると、風邪で休んでいるという答えが返ってきた。でもそれはとても本当のこととは思えなかった。

「安心しなよ。大丈夫だから」とメガネをかけた担任教師は哀れみを含んだ笑みでそう言った。彼も少年二人が仲良さげにくつついているところを何度か目撃していたのだ。

コウタ少年を日々悩ませた、>もしも<とはこういうことだった。ケンカの野次馬に混ざつた時、彼はその問題に携わつた、いわば>主役<のひとりが自分の親友だとは知らなかつたし、そんなことは夢にも思わなかつた。でもあの時もしも向こうが自分の存在に気づいていたとしたら？ 巻き添えが怖くて知らんぷりをしていたと思われていたら？

『だからあの時、僕のそばを通つたにもかかわらず、僕と目を合わさなかつたのかもしれない』

裸身

始めはそんなことがあるはずはないと思つた。だが不安は無意識のうちに、見まいと顔を背けるたびにふくれ上がつていった。彼は

図工の授業を受けながら、じつと表情を変えずまた例の脂汗を掻いていた。自分は何んでもない過ちを犯してしまったのかもしれない、と彼は思った。たとえあのケンカが自分とまるきり関係のないものだったとしても、つまりそこにカズマがいなくても、やっぱり僕は止めに入らなければいけなかったんじゃないのか？

コウタ少年の心は不安ととっぴな正義感とを行ったり来たりし、そのたびに恐れは根を張っていった。そして時おり激しい焦燥と自分への不甲斐なさが彼を苦しめた。しかしそれらの苦悩は彼をどのような場所にも導かなかつた。ただ胸が割れそうに恐ろしくなるばかりだった。

半ばほつたらかしの図工の授業が終わると、彼はまたいつかのよう外界の音がうまく聞こえなくなった。景色がぼんやりと取り留めのないものになり、目が虚ろになった。

そのような無感覚と、時おり波のようにやって来る混乱の中で、コウタ少年は結局、親友を欠いた日々を一週間ものあいだ迎えることになった。彼は学校の人間とは必要以上には口を利かず、家に帰ってさえ家族の者とはほとんど口を利かなかつた。帰って来るなり少年は部屋に引きこもると猫を抱き、ずっと何かを考えながら毛を撫でていた。落ち着いていたと思うと、次の瞬間には「裏切った」という言葉が刃となって彼の心を深く傷つけ、大事な部分をえぐり取ってどこかに持ち去っていった。

三日もすぎたあたりから、彼は眠りにつくると必ず親友の夢を見るようになった。夢の中でカズマは何度も自分を許してくれた。そして二人は夢の中で以前と同じように時間を共有し、湖のほとりで気ままに魚を釣った。夢から覚めるたび、コウタ少年は愕然とした。いつそんな夢は見ない方がいいと思えた。

*

それはある夜のことだった。木枯らしが情緒のない口笛のような不吉な音を奏でて窓を震わせ、外には無人の通りと冷たい工業地帯が横たわっていた。コウタは浅い眠りと覚醒を交互に繰り返し、時々カズマの顔が閃光のように彼の頭をよぎった。彼は無期限とも思われる感傷の海に浸っていた。少年は暗い海の底で足を三角に折り、海面から差し込む温かい光をずっと待ち続けていた。待つことは苦しく、時おり自己嫌悪にさえなったものの、彼はそうしないわけにはいかなかった。少年にとって友情とはそういうものだったからだ。

しかし深夜になってその奇怪な事態は起こった。始め、窓に何かつぶてのようなものがぶつかったのはベッドにいる少年にもわかった。風が砂利を運んできたんだろうとコウタは思った。だがそれは執拗に、一定の間隔を置いて窓を叩いた。コウタはあまりにもそれが続くので不審に思い、恐怖からくる緊張を感じながら体をむつくりと起こした。窓のカーテンには外灯の白い光が浮かび上がり、風で窓枠が音を立てるとカーテンも一緒になって微かに揺れた。そこでまたコンと何か窓を叩いた。少年は背筋に悪寒を感じた。心臓がどきどきし始め、不思議と部屋の中に何かの気配を感じるような気がした。これは夢ではない、経験が彼の頭にそう訴えかけた。それから少年は枕元の目覚まし時計で時間を確認した。夜光針は一時五十分前後を差している。

裸身

コウタは立ち上がらないわけにはいかなかった。穏やかな眠りのためには馬鹿げた幻想を取っ払ってしまわなくてはならないし、こんなことが続く前にできるなら早い段階で食い止めたかった。ベッ

ドを出て勉強机までおそるおそる歩き、彼はカーテンの端をほんの少しだけつまんで外をのぞいた。床を這う冷気が彼の膝下を無感動に撫で、少年は思わず身震いした。目玉が飛び出しそうになるほど力を込めてまぶたを開き、辺りをゆっくりと見渡してみる。

すると外灯の下に誰かが立っているのがわかった。幽霊ではない。ジャンパーのポケットに手をつ込んで腰を屈め、地面をなにやら探っているようだ。彼が目当てのものを拾い上げてこちらへ顔を向けた時、その謎の人物の正体がわかった。

彼は二階の部屋のコウタ少年と目が合うと、一瞬放心したような顔を浮かべ、それから世界中の虎たちを虜にし、その全てを甘えん坊の猫に変えてしまうような美しく穏やかな笑みを浮かべた。先ほどまでベッドの上で苦悩していた少年は、それを境にコウタのうちを去っていった。少年の心は驚きと喜びに満ち溢れ、今すぐにも外へ駆け出して天に歓喜の叫び声を上げ、この陰鬱な夜を昼に変えてしまいたかった。

二人の想いは通じ合った。コウタはすぐさま服を着替えてダウンジャケットを着込み、部屋を出る前に唇に人差し指をあてて「静かにして」という合図をカズマに送り、それからこっそりと部屋を抜け出した。階段を慎重に一步一步下り、胸躍らせながら居間を横切った。一階では常備灯が物憂く部屋を浮かび上げながら、コウタに深く潜りながら母親が眠っていた。少年は息を止めて玄関で靴を一足つまみ、げっそりするほどの時間をかけてドアを開けた。外の風は強く、一瞬ひゅっとうとうという音が家の中まで響いた。彼はあわててドアを閉めると小ぢんまりした家の門を開け、足音を巧妙に殺しながら親友の下へ走った。

二人は道端で抱き合い、再会を喜び合った。

「ごめん。福岡に行ってたんだ」コウタ少年の手をしっかりと握り締めながらカズマは言った。

コウタ少年はふいに真顔になった。

「どうして！」声を抑えたまま、激した口調でコウタは言った。「どうして、どうして、どうして！」

「お母さんの用事でさ、どうしてもついて行かなくちゃならなかったんだ。悪いと思ってるよ、ごめん　ねえ、それより早く行くころ、時間もあんまりないんだ」

「行くってどこに行くの？　もう夜だよ」

「工場へ行くんだよ」

「工場？」コウタの顔はあやしくなった。「いったいなににしに？」

「約束したじゃないか。いつか一緒に行こうって」

コウタは見るからに逡巡した。

「でも今日じゃなくても」

「さあ行こう」カズマは構わず友人の腕をとった。「急がないと朝が来ちゃうよ」

裸身

寝静まった家々はカンバスに描かれてしまったようにしんと黙りこくっていた。カズマは念のため自転車には乗らずここまで歩いて

きたのだと言った。二人は大人たちには決して自分たちの姿を見られてはならないと悟り、目下工場へ行くことに合意すると言葉も交わさず無心にそして真剣に走った。前を走るカズマが後ろを振り向いた時にだけ彼らはどこか勇敢な笑みを浮かべた。

「見つかったらどうする？」とコウタは訊く。

「走って逃げれば大人なんて追いつけないよ」

それについてコウタ少年にはちよつと自信がなかったが、彼の胸にはもしそうなってもカズマがきつと助けてくれるに違いないという奇妙な確信があった。コウタ少年は親友の背中を眺めながら、また彼の影が、彼の重心が自分の体に戻りつつあると感じた。二人はまた以前のように一心同体となった。これから夜中の工場に侵入することにも不思議と恐れを抱かなかった。

コウタは感謝の気持ちでいっぱいだった。誰かが彼を祝福し、彼もまたその誰かに感謝していた。自分はなんて馬鹿だったんだろう！親友は自分を見捨てていたりなどしなかったのだ。むしろ今となつては彼の純朴な心を疑ったことの方が、彼の信頼への裏切りに思えた。

第八話 「裸身」

海の方角に進むにつれ（つまりそれは工場に近づくことを意味するわけだが）、寒風がさらに厳しいものとなった。後ろを振り返ると黒い山々が集落の背後で物々しくそびえ立ち、鉄塔が電線を中継して街を囲っていた。前に向き直ると今度は工場が息を潜めて目を赤く光らせ、闇の中にうずくまっている。コウタ少年はよくベッドの中でこう考えた。夜になり街が寝静まると、工場に擬態していたでいだらぼつちが立ち上がり、赤い瞳を光らせながらずしんずしんと街を闊歩する。息を吹きかけて木の葉を震わせ、時おり気が向いたら部屋の模様替えでもするみたい。街の外観を少しばかり変えてみる。そして朝が訪れ、ふたたび工場に擬態した巨人は街の住民が困惑するのを見てひとり楽しむ。この妄想は走っている途中に、しばしば出し抜けに少年の頭のうちをよぎった。

しかし立ち並ぶ工場に近づくにつれ、少年たちにとっては意外な事実が発覚することになる。夜の工場は昼に見るそれよりもむしろ活発に働いているように見えたのだ。草むらに隠れて工場の入り口に目を見張らせていると、彼らのすぐそばをほとんどひっきりなしにトラックが出入りした。二人はひとことも言葉を交わさずにじつとその光景を眺めていたが、やがて目を見張ったままカズマがコウタ少年の腕をとった。

「ここは無理みたいだ。どこか別の場所に移動しよう」

裸身

工場の上にはぼんやりと白い光が浮かび上がっていた。二人は身を屈めながらトラックのやって来ない隙を狙い、道路に飛び出ると急いで工場の裏手に回った。彼らは駐車場の塀をよじ登って車の後ろに隠れ、周りに人がいないことを確認すると合図し合ってまたど

こが適当な入り口を探した。この時も二人の表情に不安は見られなかった。水を得た魚そのままに、彼らの瞳には冒険心が光り輝いていた。

「ねえ」とコウタはささやいた。「もしその猫を食べちゃう機械が本当にあるとするなら工場のどこにあるんだろ？　だってこれだけ大きいんだものさ。すぐには見つけれないんじゃないかな」

カズマは白いワゴン車の陰からじつと前方の闇を見据え、車の側面に左手を添えていた。ふいに彼が振り返って、その手がコウタ少年の腕を掴む。「ねえその話はまた後でしょうよ。もし今日見つからなければ……それでもいいんだ」

「じゃあ今日は偵察ってことでいいのかな」

「うん」と彼は答えた。

駐車場の隣には小さな菜園があり、冷たくなった土の上にはぱつとしない野菜が並んでいた。コウタは興味本位からよほどひとつ頂戴して味見したかったが、あんまりにも色が悪いのと状況が特別なのでやめにしておいた。彼らはそれから何度かちままとした移動を繰り返した。時おりトラックが工場へ入ってくる音やバツクする音、ドアを勢いよく閉める音が外壁にこだました。手がかじかみ耳はちぎれてしまいそうなほど痛んだ。大人はひとりも工場の外に立ってはいない。ただトラックの音が間断なく聞こえてくるだけだ。

裸身

彼らは塀に沿って内側を回りまわるうち、やがて死んだように静かな建物を見つけ出すことができた。入り口に白い軒灯がぽつんとついただけのどこか寂れたその建物は、他の施設の造りとは違い、サイズも納屋くらいの大きさだった。中からはどんな気配も感じら

れない上、壁に窓がひとつとしてない。まるで角砂糖でできた密室のようだった。ちよつとここで待っていてくれという合図を送り、カズマが辺りを見回しながらドアに近づいた。それから二三度ノブをひねり、またコウタ少年のいる車の陰に戻った。

「どう?」とコウタがささやく。

「ダメだよ。開いてない　でもどうにかして開けなきゃ」

「他に入り口は?」

「ないね」とカズマは首を振った。「向こうはきつとまだ大人がいるからダメだよ」

答えが保留されたまま、二人はその場でしばらくのあいだ黙っていた。コウタ少年は手の指がもうほとんど動かなくなっているのを感じていた。さながら自分の手が木彫りの彫刻に思える。帰ろう、という言葉が彼の喉元までせり上がってきていた。だがそれは以前と同様に、自分の口からはどうしても出すことができなかった。

どちらかの鼻をすする音が冒険の失敗を物語始めていた。世の中には遂行されなければならぬ仕事というものがある。コウタ少年にとって、カズマとは失敗を犯してはならない人間のうちのひとりだった。彼は真に気心の知れた友人の落ち込んだ姿を見ることがなにより怖かった。

裸身

そのとき、初めて人の声が耳に届いた。二人はぱつと顔を上げてと目を見合わせ、すぐさまカズマがコウタの手首を掴んだ。静かにしているんだ、とその手はコウタに物語っていた。声はなにかをぼそぼそと話しながらこちらに向かってくるようだった。思い直した

カズマが少年の手を引き、二人はあわてて塀のそばにあるドラム官の後ろに身を潜めた。男たちの足音が近づくにつれ、ちやりんちゃりんという金属のぶつかる音が聞こえてきた。それはほぼ間違いない鍵の立てる音だった。

やがて暗闇の中につつすらと男二人の輪郭が浮かび上がる。背後に工場の強烈な光を浴びているせいで顔は見えないが、男たちの白い息がもくもくと、工場の煙突から吐き出される煙そっくり建物に屋根に昇っていく。地味な色合いの防寒服を着た大人たちは迷いなく例の建物に足を向けていた。やがてひとりか二人の前に立ち、腰に下げている鍵束を取り外して軒灯の光にかざした。少年たちはじっと息を殺してその様子を見守っている。ひとりが鍵を選んでいると、後ろで煙草を吸っていた男がしびれを切らせて横から「違う、それだよ　ああ、もういい貸してくれ」と鍵束を奪い取り、すぐに鍵を一本選んでドアノブに差し込んだ。男はドアを開くと煙草を外へ投げ捨て、しっかりとくれよとつぶやいて中に入っていった。続いてもうひとりも部屋の中に消えた。

それから数秒間の沈黙が訪れた。海からやって来た一陣の寒風が煙突の煙を掴んで持ち去り、どこか遠くの方から自転車の倒れる音が聞こえた。コウタ少年はカズマの背中に額を押しつけた。体が震え、歯ががちがちと音を立てている。行こう、と友人がささやいた。中に入るう。

コウタは驚いて顔を上げた。「え、今？」

「今しかないよ」とカズマは言った。彼の声に焦りはなく、状況に似つかわしくないほど冷静で確信的だった。「入ってすぐどこかに隠れればきつとばれない　ほら、さつき玄関が見えただろう？」

「うん。でも」

「ねえ本当に今しかないんだよ」カズマはコウタに振り向くと彼の両手をとり、自分の頬にあてた。「すごく冷たい。寒いのか？」

コウタ少年はうなずいた。

「もうちょっとだけ我慢して。これを聞いてくれればもうお願いは絶対にしないって誓うから」

コウタ少年は肯くことができなかつた。ただ頭を少しうなだれただけだつた。

「玄関の横に靴箱があつたらう？」彼はかまわず続けた。「あそこ
のそばにすぐ隠れるんだ。絶対に大丈夫。中は暗いんだ。ほらドア
窓にも明かりが透けてない。もし見つかったもおれが全責任を取る
よ。約束する」

コウタ少年は少しのあいだ考えていた。「……わかつた。僕も行く」

「よし。さあ立つて」

手を引かれて立ち上がると、カズマがドラム官の陰から身を乗り出して辺りを注意深く見渡した。それから後ろを振り返ってささやく。「いいかい、足音を立てないように歩こう。あせっちゃダメだ」
。二人は先ほどと同じように身を屈め、できるだけ大きく股を開いてゆつくりと歩いた。さえぎるものがなくなってしまうと自分が丸腰で銃弾の飛び交う陣地に足を踏み入れたような気分になつた。コウタ少年はやがて恐怖のあまり目をつむつた。カズマの手のひらの

感覚だけを頼りに歩き、そのみを信頼した。もし見つければどうなってしまうことだろう？ 彼らは嚴重注意を受けたあとだし、しかも時間が時間だ。

そして彼はある場所ですまずいてしまった。心臓がものすごい力で絞られ、背筋に針金のような悪寒が駆け抜けた。あやうく声を出しそうになったところで、自分の口に誰かの手のひらが覆いかぶさった。まるで用意されていたかのように、カズマの手が彼の口を覆っていたのだ。コウタ少年はすぐさま何度も肯いた。それでカズマも肯いて手を離れた。ドアはすぐ目の前にある。

カズマは躊躇なくノブに手をかけると、慎重に、だがやはり躊躇なくドアを開いた。静かすぎるくらい静かな瞬間だった。その時だけは風もぴたりと止んでいた。思ったとおり電気は点いていない。ただ男たちだと思われる影が闇の奥でこそごとと動いている様子はわかる。玄関を上がってすぐのところ、少年二人はひとまずその場に立っていた。ただじつと立っていたのだ。靴を脱ぐことなんてもちろんできない。

「よう、懐中電灯をくれよ。投げてよこしてくれ」という声が部屋の中から聞こえた。

その声でコウタ少年は思わずカズマの服にしがみついた。恐怖で胸がいつぱいになった。男たちと自分たちとの距離は十メートルもない。もし彼らが振り返り、目を凝らしてこちらを見たら、間違いなく少年たちの姿を捉えるだろう。コウタ少年は恐れに従って自然と引け腰になった。そのまま地面に尻をついてしまいそうに見えた。だがカズマの手がまた彼の腕を強く握り、それからゆっくりとどこかへ誘導した。もはや錯乱状態に陥っているコウタには景色はもちろん、自分がどこにいるのかさえわからなくなった。足は誘導に従

つて動いているが、それは自己とは乖離した意識の中で動いているように思えた。そして気づくといつのまにか彼は座っていた。完全なる無意識の中では、自分の起こした行動はあとから意識に付いてきた。でも僕は今どこに座っているんだろう？ それにカズマはどうして暗闇の中でも迷わず動けるんだ？

やがて懐中電灯の真つ直ぐな明かりが部屋の闇を割いた。まず地面を照らし、それから舐めるように円のかたちをした光が壁を這う。剥き出しの工具を照らして明かりがゆがむ。「光が弱いな」と言つて男は懐中電灯を二三度叩いた。光が点滅し、揺れる。明かりがこちらに近づいたとき、コウタは咄嗟に自分の口を手で覆った。向こうにも自分を見ることができない！ 怯えた彼は隣にいるカズマの肩に自分の肩を強く押しつけた。だが段々それがカズマ本人なのか確信が持てなくなってきた。隣にいるはずの友人にあまりにも気配がなかったからだ。

「ありました」と懐中電灯を持っていない方が言った。

「どれ」

「こつちです、これです。違いますか」

その声で懐中電灯の明かりが部屋の隅に置かれたアルミ缶のようなものに照らし出した。ああそれだ、と拍子抜けしたように男が言う。と、二人は聞き取れないほどの声で二三言葉を交わしてから「せーの」の合図で大きな音を立てた。なにかが上の方から崩れ落ちてきたようだった。だが男たちはその物音にも特に気にするような素振りや言動は見せず、「せーの」からは何も言わずに出口へと向かった。懐中電灯をベルトに挟んだのか、明かりが天井をむちゃくちゃに照らした。男たちの体に負荷がかかって床の軋む音がした。

「灯油はあんのか」

「ええ、あります」

「じゃあいい」

コウタ少年の心臓は激しく警告を打ち、痛いくらい胸の壁を叩いていた。どうやら男たちが探し物を見つけたことはわかる。けれど出口へ向かう合間に彼らは自分の前を通るだろう。そう考えたときに、少年は自分の犯した重大な過失に気づいた。部屋のドアがわずかに開いているのだ。彼の緊張はいよいよピークに達した。眉がへの字に曲がり、目がみるみるうちに潤んだ。

だが幸運にも、そこにはどんな事件も生まれなかった。都合上出口に背を向けていたおそらく年少の人間は、ドアに半分振り向くと窮屈そうに後ろ手でノブを回した。そしてすんなりと二人して外へ出て行った。男たちは部屋を出ると一度荷物を地面に置き、それからドアに鍵を掛けて、また荷物を持ち上げてどこかに去っていった。遠くから年長者の笑い声さえ聞こえた。

足音がずっと遠ざかって行ってしまっても、用心深い少年たちはじっと押し黙って気配を殺していた。沈黙のあいだ、ふとコウタ少年は、もしや自分がひとりなのではないかという錯覚に襲われた。そのとき彼の内で起こった感覚は、本人にも説明のしようがないものだった。今までは全て自分の見た幻覚で、本当はカズマなどいないのでは？ どうしてそんなことを考えたものか、彼は思わずぞつとした。体が凍りつき、頭の中が真っ白になった。

裸身

「ねえ」

「やったな」それはカズマの声だった。声の質で、暗闇の中でも彼が笑みを浮かべていることがわかった。「さあ立って」

コウタは首を落つことすように安堵してみせた。

「いなくなっちゃったのかと思ったよ」

「どうして？」

コウタ少年はなんでもないと風を振り上げた。「もういいの。安心した」

闇の中に差し出された友人の手を取って立ち上がると、自分の体が何年も油の差されていない機械人形のように思えた。部屋の中は気のせいかわよりも寒く感じられた。二人は身震いしながらお互いの存在を確かめ合うように身を寄せ合い、その場から二三歩部屋の中心へと進んだ。ようやく呼吸が整い、コウタは肺の奥底から細く長い息を吐き出した。

「懐中電灯があればよかったね」とコウタはささやいた。

「持ってくるんだっただ。ちくしょう。部屋にはあるかな」

コウタは首を振った。「わからないよ」

裸身

窓がないせいで部屋の闇は不吉に強張り、密度も異様に一定だった。二人は歩きながら体のいたるところをなにかしらにぶっつけ、たびたび危うく転びそうになった。どれも硬い金属のような感触だった。やがて二人は部屋の中を物色しながら小さな声でしりとりを

始めた。カズマの言った「ブラック・バス」から始まり、「スイカ」、「カモメ」、「メダカ」、「カラス」、「スネ」、「ネコ」、「コドモ」、「モウジユウ」。決着のつかないしりとりが進行するにつれ、部屋の様相も大体把握することができた。わけのわからない専門的な機械、刃のこぼれた鋸、様々な工具、端に詰まれた大同小異な木片。どういうわけかガスコンロまである。そしてそれらの要因を集約した結果、この部屋は要らなくなった物や、処分に困った物を保留するかたちで置いておく物置であることがほぼ判明した。

それから二人は玄関わきの壁に取り付けられた懐中電灯を見つけた。男たちがそれを無視したのか、それとも気づかなかったのかはわからない。カズマは懐中電灯を手にとってそれがまだ使用可能かどうかを確かめると、次はこれを持って行こうと言った。その場は肯いたものの、コウタ少年はなにかの引っかかりを感じた。そしてこう言った、「次って……それを持ってどこかに行くの？」

「そうさ」カズマは手の中で懐中電灯を回した。「別の場所で例の機械を探すんだよ」

「例のつて、猫を食べちゃう……」

「そうだよ。それを壊しに来たんだから」

コウタ少年は言いずらそうにうつむいていたが、やがて勇気を振り絞って言った。「ねえカズマ、きつと機械はないんだよ。嘘なんだ。みんながおもしろおかしくしようとしてでっちあげたいんちき話なんだよ」

「いんちき？」

少しのあいだ沈黙が部屋に下りた。

「どうしてそんなことが言えるんだい？」とカズマは穏やかな声で言った。彼の声は闇の中ではどこかしら聞くものを惹きつける響きがあった。

「正直に言うよ。僕は見たんだ、工場の人たちが猫に餌をやっているのを。だから」「彼はそこで言いよんだ。「だから猫が工場に集まったりなんかしたんだ。それをみんなが見て……」

「君は嘘をついてる」

コウタはびくんと体を震わせた。彼の心臓に何者かがとんかちで釘を打ったようだった。

「どうして？」彼の声は震えていた。

「君のことはなんでもわかるよ、コウタ」カズマはそう言うとなにかを諦めるようなため息をついてその場に腰を下ろし、あぐらを掻いて懐中電灯のスイッチを入れた。壁に舞台照明のような円い光が脈絡を欠いて現れる。「さあ、隣に座って」

コウタは言われたとおりそばに座った。

「さあご覧あれ」とカズマは言って、ひとつ咳払いをした。「さあご覧あれ。今からお芝居が始まりますぞ　ちよっとこれ持っていて動かさないように」

裸身

コウタは懐中電灯を受け取ると、指示されたとおり、膝の上に置いて照明の位置を固定した。これから親友がなにをしようとしてい

るのか、彼にはさっぱりとわからなかった。

「ねえ、カズマ？」

「しい、黙って聞いて」

コウタはしぶしぶ肯き、黙って壁を見つめた。

「さて、ここにひとりの男の子がいました」とカズマは言い、懐中電灯の光源に向かって指を一本差し出した。円い光の中に巨大な影が浮かび上がると、彼は指をやや自分から遠ざけて影の大きさを調節した。「彼は転校を繰り返すせいで、ひとりも友達のいない、とても寂しい少年でした。家の外に一步出ると、もう誰とも話したりしません。しかしある日のことでした。近所に住む男の子にサツカに誘われて公園に行ってみると、自分に対して盛んに話しかけてくる、同じ年頃のおチビな少年がいました」カズマは反対の手でもう一本指を立て、光の中に登場させた。「真つ黒な髪をした華奢な男の子で、彼もあまり友達が多いタイプじゃなさそうです　　ちやんと聞いている？」

コウタは暗闇の中で大きく肯いた。彼の心臓はどくんどくと高鳴っていた。

「始め、少年はそのお友達を避けようとはしました。なぜならそのお友達は結局のところ自分を傷つけてしまうからです」影が一本、ゆっくりと退場する。そしてまた戻ってくる。「でも彼と話をするうちに、少年は自分があとと悲しい思いをすることなんかすっかりと忘れ、相手のことをもつとよく知りたいというシヨウドウに駆られました。そしてお友達と遊ぶうち、少年はある発見をしました。自分が彼と離れ離れになることを想像してみても、もうちっとも悲

しくなんかありません。少年は毎晩そのことについて考えました。するとあるひとつの力セツが浮かび上がってきます。もしかすると本物の友情というのはこのことなのかもしれない！」

それだけ言い終えると、光は点灯したときと同じように脈絡なく、ふっと消えた。部屋に横たわっていた闇と沈黙はさつきよりもずつと重々しく感じられた。寒さを忘れてしまふほど深く、意味ありげな沈黙だった。

やがてカズマは語りだした。「おれはさ、今まで転校ばかりしてきたけど、友達をよくできたんだ。でもね、友達を作るといつか別れなきゃいけない。そういうきまりなんだ。そしてそれはすごく悲しいことなんだよ、耐えられないくらい。だからいつかこの転校ばっかりの生活が終わるとして、それまでは、最後の学校になるまでは友達を作るのは我慢しようって決めたんだよ。でもこうしてコウタとおれは友達になった、親友になった。そうだろう？ 今までたくさんのお友達ができたけど、本当にわかりあえたのは君だけだっと思う。嘘じゃないよ。だからコウタと別れてもちっとも悲しくなんかないし、つらくもない。だっておれたちはいつだって繋がっているわけだしさ！ だからね、もしもこの先、おれがいなくなってしまうとしても、君も悲しまないでよ。……そう約束してくれる？」

「うん。約束する」

「オーケー。震えてるみたいだけど、寒いのか？」

コウタ少年は肯いた。

裸身

「じゃあ服を脱いで」カズマはそう言うと、コウタの正面に回った。

「上だけでいいから。そうそう、上だけ裸になるんだ。そうして体をびったり寄せ合えばきつと温かくなるよ　ほら、脱いで」

コウタ少年はなかば引き剥がされるように服を脱がされると、刺すような寒さに身震いした。ほら、もつとぴたりくっついて、とカズマが言い、二人はふたたび横に並んで肩と肩をくっつけ、互いの腕を回し、二人分の上着をその上からかぶった。

「どう、温かいだろう？」とカズマは言った。「手はやっぱりちょっと冷たいけど」

「温かい」コウタの声にはなにか新しいものでも発見したような響きがあった。「でもまるで猫みたいだね、僕ら」

カズマは上着の下からごそごそと手を外へ出し、今度は懐中電灯で天井を照らし始めた。物憂げな色合いの天井が姿を現し、その一角に蜘蛛の巣が見えた。

「星を想像してみて」ささやくようにカズマは言った。「満点の星空だよ。どう、できる？　ほら、あっちにシリウスが見えるだろう、おおいぬ座だ。それから　こう、こう、と来て冬の大三角形。真ん中にはうっすらと天の川が見える。どうだい、見えるだろう？」

「うん、見える」

「本当に？」

裸身

座

コウタ少年は肯いて天井を指差した。「あのくもの巣がオリオン

彼らはその拍子にけらけらと笑った。隣人が笑うと、その振動が自分にも伝わってくる。部屋が紛れのない親密で温かな空気に満たされるのが二人にはわかった。彼らは肩どころか頬までをぴったりとつけ、引き続き十二月の夜空を観測した。オリオン座、うさぎ座、シャワーのように降り注ぐふたご流星群……。懐中電灯の明かりが右に左に揺れるたび、彼らはいかにもおかしそうに笑った。きつと本人たちにも何がここまでおかしいのかよくわからなかったはずだ。

友情のうたげは朝方まで続いた。少年らは話が終わると今度は互いの体をくすぐり合い、暗闇の中でじゃれあつた。それが終わるとまた話が始まつた。彼らはそこが工場の敷地内であるということもすっかり忘れていた様子だつた。やがてカズマがふいに立ち上がつてドアを開けると、空が薄紫色に染まつている。家々の屋根が黄金色に輝いている。日の出の光がそのときだけ友人の裸身を神秘的に描き出したのをコウタ少年は忘れなかつた。

そのようにして冒険は終わった。それが二人にとって最初の冒険であり、最後の冒険だつた。

最終話 「スタンド・バイ・ミー」

工場探索から一週間が経ち、親友を失ったコウタ少年はその後、奇妙に平衡感覚を欠いた日々を送っていた。授業中もうわのそらで、誰かに話しかけられてもうまく聞こえなかった。そして言いたいことをうまく口にすることができなかった。誰かとのコミュニケーションに失敗するたび、どうしてこんなにうまくものが言えないんだろう、と彼はもどかしい気持ちになった。それは少年を動揺させ、不安な気持ちにさせた。彼にはまだ混乱というものの自体を把握することができなかった。孤独を受け入れられるほどの強さがまだ身に備わってはいなかった。

ある日、教室内で生徒が遠巻きに少年を冷やかしたことがある。テスト中にトイレに行きたくなり、手を挙げると「馬鹿だなあ、おまえ。さっき行きたい人は行っておきなさいって言われたのに」という声が聞こえ、教室中に悪意を孕んだ笑いの渦が巻き起こった。そのあと担任教師が一喝しなければ、いつまで笑いが続いていたかもわからない。しかし注目すべきは少年に反抗するような余力がまったく残っていないことだった。からかわれたことに対して恥を感じることもなかった。彼は屈辱を感じるにはあまりにも内省に深く沈み込みすぎていた。そしてそうすることでまた自分の身を守っていたのもたしかだった。彼の気持ちはなによりからっぽだった。

裸身

カズマは自分にどこるか、学校中の誰に伝えることもなく街を去って行ってしまったのだった。転校の旨も一週間後になってようやく電話で学校に伝えられた。コウタ少年はそれを別のクラスの生徒から聞いたのだ。石井くんなら転校したらしいよ、と。少年はどうしても詳細が知りたかったので母にそのことを相談し、学校に電話をかけてもらった。電話に出たのはあのと喧嘩の仲裁に入った律

儀そつな教師だった。「詳しいことをお話しすることはできませんが……」と彼は前置きし、石井カズマ君は母親の都合で福岡の実家に帰ったのだと言った。母は電話を切ると悩ましげに眉を寄せて膝を床につけ、子供の肩に手を置きながらわかりやすくそのことを説明した。少年は話を聞いているあいだ終始無表情だった。母の心は痛んだ。

「また別のお友達を作ればいいじゃない。ね？」

その励まし方は猫のジロがいなくなつたときとほとんど同じだった。それは大人にはわかりにくいものだったのかもしれない。しかし母親のその言葉は息子を決定的に傷つけ、損なわせることとなった。彼はその言葉を聞くやいなや無重力状態から解かれたように突然目の色を変え、母親の手を乱暴に払いのけると、瞳を震わせて自分でもわけのわからない言葉を相手に向かってめいつぱい叫んだ。母親を突き飛ばし、怒声を浴びせかけた。それから廊下を走り出し、階段を駆け上がって自分の部屋にこもると、本棚やベッドを力づくで動かし、ドアに防壁のようなものをこしらえた。彼は自分でも自分がなにをやっているのかわからなかった。ただ激しい怒りだけがそこにはあった。ひどく息があがり、肩がふいごのように上下した。母は二階の物音に耳を傾ける様子もなく、床にへたりこんだまま驚きと困惑とで泣いていた。

夜が来るまで少年は自分のベッドの上から動かなかつた。膝を折り曲げて腕の中に顔をうずめ、ひたすら過ぎ去った過去の日々に耽った。彼は何もしていないことが親友の友情に対する誠意だと自らそう思い込んだ。母親が何度かやって来てドア越しに謝ったが、彼は何も答えようとはしなかった。少年の心は膜のようなものでびったりと閉ざされていた。あるいは閉ざされたふりをし続けた。反証として、父親が仕事から帰って来ると彼の心は怯えた。なぜな

ら父には感傷や安易な反抗などは絶対に通用しないとわかっているからだ。彼は本当のところでは父が嫌いだった。

部屋がノックされる。少年はおそろおそろ顔を上げ、ドアの先にいる人物の顔を想像する。心臓の音が耳の奥で鳴り響き、吐く息が微かに震える。やがて「開ける」という父の低い声が聞こえた。早く開ける、怒らないから。

「嫌だ」と少年は言った。

「どうして」とくぐもった声が返ってくる。

「怒るから嫌だ」

「怒らないよ」と大儀そうな声で父親は言った。「今も言ったろう。怒らないからドアを開けなさいって」

少年はゆっくりと立ち上がって本棚をどかした。ドアが開かれると、彼は恐れをたたえた瞳で壁のように大きい父親を見上げた。

「お母さんになんて言ったんだ」と父は言った。

少年は口を結んだまま首を振ってうつむいた。

「友達がいなくなっちゃったんだらう？」

少年は肯く。

裸身

「じゃあしょうがないじゃないか」と当然のように父は言った。「また新しい友達を作ればいいだらう。おまえは明るい子供なんだし、

今までだって何人も友達を連れてきたじゃないか。ええ、そうだろう？」

彼は泣いた。膝の力が抜け、あやうくその場にくず折れてしまいそうになった。涙がぼろぼろと目の端からこぼれ、着ていた長袖のシャツを点々と黒く濡らした。もう誰にも自分の気持ちがあわかってもらえないことを知ってしまったからだ。

父は様子がおかしいと思ったのかこう続けた。「どうして泣いてるんだ、ええ？ わけを言いなさい。どうして」

「お父さんには何もわからないんだよ！」少年は顔を上げると突然そう絶叫した。「僕にしかわからないんだよ！ もうかまわないですよ！」

父親はしばらくのあいだ言葉を失っていたが、舌打ちと共に冷静さを取り戻し、一階にいる息子の母親に向かって「もうおれは嫌だぞ。やることはやったぞ」と怒鳴った。「おまえやれよ。こっちは疲れてんだ、畜生まったく」。

その後、ある人物が少年を訪ねた。母方の叔父だった。

父はあの出来事からこの問題には一切係わり合いになりたくないと宣言し、夫人に相談をうけても邪険に突き放した。大体この問題の責任はおまえにあるんだろう、と父親は夫人に言った。おれには関係ないことじゃないか。

裸身

そのようにして、息子に対して無力な母親は、息子と特別仲の良かった自分の弟を家に呼び寄せた。人の良い叔父は、仕事を休んで

まですぐさま姉の下に駆けつけた。しかしそれは結局どのような効果も表さなかった。やがて少年は部屋を出て一階には下りて来るようになっていたものの、誰に話しかけられても眉ひとつ動かさない子供になっていた。真正銘の無感覚が彼を包み込んでいた。本来の意味でもうなにも考えることができなくなってしまっていた。

「ねえ」叔父は少年の腕を掴んで熱っぽく言った。「どこか行きたいところがあるなら連れて行ってあげるよ？ 遠慮しないで言うてごらん？」

少年は猫すらも相手にしなかった。叔父の訪問はかえって少年をより深みに沈めたただけのように思えた。

叔父の泊まった晩、夜中にふとトイレに起きると、少年は一階からの話し声に廊下で足を止めた。耳を澄ますと、食器のぶつかり合う音と水の勢いよく流れる音が聴こえる。母親が食器を洗いながら誰かと話し込んでいるのだ。相手が父でないことは母の声の調子ですぐにわかった。話の相手は叔父だった。彼はテーブルに座ってコーヒーを飲み、ときどき身振りも交えながら背中にいる姉と会話をしていた。

「それでなんて？」

「たぶんあの子は私を軽蔑しているんだと思うの」と姉は言った。「たしかにね、今思うとひどいこと言うっちゃったのよ」

「だからなんて？ 姉ちゃんはなんて言ったの、コウタに」

「別のお友達を作りなさいって」

弟は静かな声で笑った。彼の笑い方には軽蔑よりも余裕が感じられた。

「そりゃ姉ちゃんが悪いよ」

「だから何度も謝ってるんじゃない、あの子に」

「あのね」と弟は姉の方に振り向き、コーヒーを一口すすった。「子供はさ、自分が大人にならないと信じてるんだよ。だからすぐに大人を　親を軽蔑するんだ。だからそう気にしすぎない方がいいと思うよ、真面目な話。姉ちゃんは……なんて言うんだろ、母親としての意識が強すぎるんじゃないかな。もつと子供と同じ目線になつて物を見てやらなきゃ」

「そんなこと言つたつてこっちは大人じゃない」と弟に背を向けたまま姉は言う。「親として見る以外ないじゃないの」

「それを言つたら始まらないさ。大人と子供の考え方は違うんだほら昔にいい例があつたじゃないか。やっぱり姉ちゃんが庭木の枝を折つたときもさ」

「いつの話よ、それ」

「ほらあ、姉ちゃんが十歳かそこらのときに、庭に植えた梅の木の枝を折つちゃつたじゃないかよ。それで親父がカンカンに怒って、雨が降つてるにもかかわらず姉ちゃんを庭にほっぽりだしたろう？」

『枝を折られた木の気持ちになつてそこで反省してる馬鹿野郎』
つて。……全然覚えてない？」

裸身

「あつたわね」姉はそう言つと水道の蛇口を止め、手拭を取つて弟

の向かいに腰を下ろした。彼女はいくらか気恥ずかしくも得意気な顔に見えた。

「今思うと馬鹿馬鹿しい話だなあって思うよ」と弟は言った。「だって枝ぐらいまだいいじゃない。ましてや姉ちゃんは折るつもりがあつたわけじゃないんだからさ」

姉は微笑んでからふたたび立ち上がり、自分のコーヒーを入れた。「たしか夕食のときかなにかにお父さんが言つてたんじゃなかった？ 害虫がどうとか。ほらあそこ日陰だし」

「そう。あのときのことはすごくよく覚えてる　だからさ、姉ちゃんも親父に誉められたかつたんだな。それで庭を手入れしようとして……おれのこと誘つたけど、おれは断つたんだ」

「あんたよく覚えてるねえ、そんなこと」と姉が笑いながら椅子に座つてコーヒーを飲む。

「おれ二階の窓からずっと見てたんだよ。姉ちゃんが庭でわんわん泣きながら雨に打たれてるところ。あれだけはさすがに子供心に胸が痛んだね　でも今思うとやっぱりあの泣き方は違つたな。怒られて泣いてるんじゃないやつだ」

「じゃあどんな風に泣いてたつて言つたのよ」

弟は首を振つてカップに口をつけた。「自分に同情して泣いてたんだよ。おれにはわかるね　だつておれにも同じようなことがあつたからさ。姉ちゃんは善意でしたことが裏目に出ってしまった自分を哀れんで泣いてたんだ。この善意でしたことがつていうのがポイントだよ。あとそれを誰も理解してくれなかった、信じてくれな

った、っていうのも重要だね。その方がかえって感傷の海に浸れるんだ。自分の現状をより悲劇に追い込むことで自己憐憫に深く演じることができる」

「子供のころだもの。仕方ないでしょう」「姉はそう言ってコーヒーを飲んだ。」

「つまりおれが言いたいののはさ」彼はそこで自分の話し声が段々大きくなっていくことに気がつき、ひとつ咳をしてから声を落として続けた。「つまりね、コウタも自分に同情してるだけなんだよ。結局のところは自分がかわいそうなんだ」

「……ふうん。なるほどね」と姉は鼻の先で手をひとつに組んで弟の目を見る。それからもう一度「なるほど」とつぶやく。

「でもどうして姉ちゃんはあるなかに枝をバキバキに折っちゃったんだろう。二三本駄目だったらもう止めておけばよかったのに」

「きつとなんとかそれなりにみせようとしたのよ。うまくごまかして」

「とにかくジョージ・ワシントンにはなれなかったわけだ　まあでもあれは作り話だったっけな」弟は椅子の上で大きくのびをし、頭の後ろで手を組んだ。「親父も結局は丈夫な木に買い替えちゃったんだものな。シマトネリコかなにか」

裸身

それからしばらくのあいだ部屋に沈黙が下りた。時計の針がコツコツと深夜の窓枠を打った。姉はそのあとで近所の野良猫の話をした。向かいの住人が無闇にエサをやるおかげで一帯の人間が参ってると。何度注意しても止めないのよ、あの人。

自分に関する話が終わると、少年はのっそりベッドに戻った。

布団にもぐりこみながら、彼の体は小刻みに震えていた。少年は驚くほどの確に自分の心のうちを見透かされていたことに激しくショックを受けていた。悔しさと羞恥が彼を内側から揺り動かし煩悶させていた。少年は暗闇の中で目を開けたまま、ぐつと歯を噛み締めた。自分には何も言い返すことはできない。持って行き場のない動揺や憤りが彼のうちで激しく燃えさかり、胸に拳をねじ込まれるように彼自身を苛んだ。

子供という劣等感からは誰も抜け出すことはできない。

*

夜になると時おりいさかいの音が聞こえることがあった。父が母を責めているのだ。自分のせいで母親が責められているらしいことは息子にもわかった。しかし彼はそれも黙殺した。自分は今何よりも不幸で孤独なのだと思っただけ。それ以外はなにも思わなかった。

先にねを上げたのは母親の方だった。母は明らかに疲弊していた。彼女は夕飯どきに口を利かない息子を見て突然しくしくと泣き出し、それを見た弟がわけもなく泣き出した。そして泣きながら指を差して兄を咎めた。少年にはどうすることもできなかった。彼はテーブルから立ち上がって家を飛び出し、あてもなく街を走った。空の端では夕暮れが終わりかけていた。少年はそれから親友と初めて会った公園に入り、物置小屋に隠れてからわんわん泣いた。思い出が熱い涙となって零れ落ち、少年の顔を水びたしにしていた。

裸身

彼は一時間以上にわたって泣き続けていた。感情の満ち干きが幾

度となく繰り返され、そして徐々に収まりを見せていった。泣き終ったとき、彼はこれまで以上にからっぽだった。小屋の戸を開け、公園の外に向かってとぼとぼ歩いていくと、水銀灯の白く冷淡な光が少年の影を長く地面に落としていた。空はとぼりを垂らし、一面濃紫色に染まっていた。今ごろ近所の大人達が総出で自分を探しているに違いなかった。冬の星々に見下ろされながら、彼はゆっくりと自宅に帰った。その時近くの家からはナット・キング・コールの「クリスマス・ソング」が流れていた。

みな誰も 七面鳥やヤギドリが

その季節を 輝かせていることを知っている

瞳をきらきら輝かせた子供たちは

今夜は眠ることなんて出来ないとわかってる

それが少年が親友と過ごした日々の最後の記憶だった。その後、彼は大人になっていくうちに、幾度となくなつての親友を思い浮かべた。その日々は後々になつても、少年の人生にとってかがり火のように感じられた。あの夜、家に着くまでのあいだに、これはもう終わってしまったものなのだと彼は考えた。かつてかけがえのない親友がいた自分は今、親友を失った自分にならなくてはいけない。人生とはそういうものだった。そう感じたとき、カズマがあの晩で伝えようとしたことの意味が彼にもわかった。親友のいない自分に、親友がいたころの自分を演じきることはできない。

涙がかわいたとき、少年は感じるだろう。もはやそうすることの意味もないのだと。

最終話 「スタンド・バイ・ミー」 (後書き)

s t a n d b y m e

h t t p : / / j p . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v =

F X - 7 g F H k U 0

裸身

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4205e/>

裸身

2009年5月29日04時23分発行